

# JLTA Newsletter

## 外国語教育評価学会

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 7 発行代表者：大友 賢二 2000年(平成12年)8月7日発行  
発行所：外国語教育評価学会 (JLTA) 事務局  
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>



\*\*\*\*\*

### JLTA Language Testing Workshop に想う

外国語教育評価学会会長 大友 賢二 (常磐大学教授・筑波大学名誉教授)

このたび実施した JLTA Language Testing Workshop (JLTA 言語テストワークショップ) は、世界における教育テスト研究機関の最高峰の一つである ETS (Educational Testing Service) との共同計画の実現であり、わが国の外国語教育界の歴史に残る大きな事業の一つでもありました。これを開催した経緯とその意味について簡単に述べておくこととします。

まず、これを開催した理由は何かということです。JLTA の会則、第3条には本学会の目的を達成するために行う事業の内容が示されています。その(2)では、国際会議、国際ワークショップ等の開催となっていて、それを実行したことになります。つくば市で開催した1999年のLTRC 99はまさにこの国際会議にあたり、今回の JLTA Language Testing Workshop は、この中の「国際ワークショップ」にあたるものです。

その準備経過は次のようなものでした。国外の ETS と共に行った今回のワークショップは、本学会にとっては初めての試みでありました。まず、事務局の考えに対する役員の方々の賛同を得、その結果をもとに JLTA 賛助会員全員へ呼びかけました。ETS は JLTA の賛助会員となっています。そこから実施希望ありと浮かび上がってきた ETS との集中的な準備を経て、今回のワークショップが開催される運びになったわけです。

この計画の基本構想は、1) JLTA の賛助会員と共に行うこと、2) その内容がわが国の外国語教育における言語テスト研究の発展に貢献できるもの、3) JLTA と当該賛助会員は学術的・財政的な協力をお互いにすること、4) JLTA の活動内容は学術的側面に限定すること等です。このような基本構想に沿って、JLTA としては、TOEFL の CBT (Computer Based Testing) の背景となっている言語テスト理論 (古典的テスト理論と項目応答理論) の紹介をその目的として活動したわけです。

ご協力・ご指導いただいた多くの関係者の方々に御礼を申し上げます。とくに、ETS (Educational Testing Service)、CIEE (Council on International Educational Exchange: 国際教育交換協議会) の絶大なご理解とご指導、また、司会を担当いただいた JLTA 会員の皆様のご協力に、心から御礼を申し上げます。

## JLTA 言語テストワークショップ 報告

本学会では、5月20日より6月10日の毎週土曜日、Educational Testing Service (ETS) のご協力を得て、全国8都市において「JLTA 言語テストワークショップ」を開催いたしました。合計で約450名の参加者があり、好評の内に無事終了いたしました。ご参加をいただいた皆様、運営にご協力いただいた皆様、どうもありがとうございました。

なお、本ワークショップの資料として作成した“Basic Concepts in Language Testing”の冊子を手ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

以下、各地からの報告です。

### 5月20日(土) -東京- テンプル大学

ETS/JLTA 共催の「英語テストに関するセミナー」は、5月20日(土)に東京はテンブル大学にて行われた。当日は雨の降るあいにくの天候であったが、150名を越す参加者があり、発表に熱心に聞き入っていた。前半はJLTAのR. Thrasher先生及び中村優治先生による「テスト理論」の説明、後半はETSによる今年10月に日本に導入されるコンピュータ版TOEFLの説明があった。午後2時から7時まで5時間という長時間にわたるセミナーであったが、参加者からの質問も活発に行われ、大変有意義なセミナーとなった。

(報告者：根岸雅史 東京外国語大学)

### 5月20日(土) -福岡- 九州ビルホール

当日は、五月晴れの暑い一日となったが、福岡市博多区の九州ビルホールの会場には、30名程の参加者が集まり、「JLTA 言語テストワークショップ」の先陣を切るセミナーの一つが開催された。

JLTAの歴史にも触れた開会の挨拶に続き、大友賢二会長より挨拶と本ワークショップの開催に至る経過の報告があった。

セッションIの前半は、中村洋一事務局長より、古典的テスト理論の基礎的な概念の説明と、問題点の指摘があった。続いて、大友賢二会長より、項目応答理論について、その歴史、理論の背景、コンピュータ・テストへの応用などの説明があった。

フロアからは、項目応答理論の理論的根拠に関する質問が出されたが、議論を深める時間がなく、残念であった。

セッションIIでは、ETSからの講師2名により、コンピュータTOEFLに関する説明と、デモンストレーションが行われ、「紙と鉛筆」によるテストから、コンピュータを使用するテストへの移行について、具体的な問題項目の提示もあわせて、丁寧な解説があった。

(報告者：木下正義 福岡国際大学)

### 5月27日(土) -広島- 広島修道大学

ワークショップ当日は、朝からあいにくの雨で、午後からは特に肌寒い一日となった。雨足は時に非常に強まり、開始直前は、たたきつけるような豪雨となり、JLTA、CIEE、ETSの各メンバーも、オーディエンスが定刻に到着できるかどうかをやや懸念していたが、20名弱の参加者が集まり、無事、開始した。

まず、ICUのスラッシャー先生の短いスピーチの後、中村優治先生から、テスト理論の基本概念・用語についての明快な説明があった。その後、スラッシャー先生が、古典的テスト理論とその問題点、項目応答理論の概念とその応用可能性等について、わかりやすく説明された。

どちらの先生のご発表も、コンピュータでの提示と口頭の説明とが効果的に連動しており、2時間弱の説明の間にブレイクを挟む必要もなく、オーディエンスは、集中して聞き入っていたようである。

参加者は、主に語学学校教師(日本人・英語母語話者とも)、大学院生、中・高・大学の教員、から構成されていた。講演中のフォーマルな場面では質問が出なかったが、

終了後、教員、院生それぞれが、個人的に質問をし、どちらの先生も、大変丁寧にフレンドリーに応じて下さった。

比較的少人数であったためと、先生方が終始にこやかにお話くださったため、リラックスした雰囲気の中で、大変充実した講演をお聞きすることができた。院生の参加者も、後程私に、「とてもためになった」と、それは嬉しそうに語っていた。

(報告者：峯石 緑 広島国際大学)

### 5月27日(土) -仙台- 東北大学

当日、仙台を中心に福島、遠くは弘前から、大学、高校、中学校、英会話学校の教員や大学生が参加し、16名という小規模ながら、熱い議論が戦わされた。発表は2部構成からなり、第1部は、中村洋一、大友賢二両先生がそれぞれ「古典的テスト理論」、「項目応答理論」に関する発表をされた。

休憩をはさんで、第2部ではETSの方がコンピュータ導入による新しいTOEFLの実施方法に関して実際にデモンストレーションを交えながら発表された。これらの発表に対してフロアからの熱心な質疑応答があった。

第1部に関して、参加者の大半は古典的テスト理論の一部のみを知っているだけで、項目応答理論に刺激を受けることが大きいとの声が目立った。第2部では、コンピュータによるTOEFLの実施方式においては、英語の実力がより正確に測定できるという利点とともに、受験者自身のComputer Literacyの有無が今後の重要な鍵であるとの認識は強かったようである。

最後にETSの方から参加者を対象とした抽選発表があり、参加者が少ないこともあり当選者が続出という幸運に恵まれたなかで盛会のうちに幕を閉じた。

(報告者：佐久間康之 福島大学)

### 6月3日(土) -大阪- 関西外国語大学

外国語評価学会(JLTA)言語テストワークショップの大阪での開催は6月3日(土)、関西外国語大学を会場にして開催された。

当初は40名程度の参加者を見込んでいたが、蓋を開けてみると100名以上に膨れ上がり、熱気に満ちた雰囲気で行われた。

セッションIでは、中村優治氏による「言語テストとは、テストの種類、テストの妥当性・信頼性・実用性」から始まり、Randy Thrasher氏からは、「古典的テスト理論、項目応答理論」の説明がなされた。

会場からの主な質問は、「発音テストの妥当性・信頼性に関わる問題点」「TOEFLはNRテストかCRテストか」「IF/IDの適切な数値」「MCテストの項目数/選択肢数」「TestingとTeachingの関係」「CBTの特徴」などで、予定していた時間を大幅に超過するほどであった。

セッションIIでは、ETSスタッフによるコンピュータ版TOEFLの説明がなされた。内容・様式が従来とはかなり異なるため、参加者は熱心に説明を聞き入っていた。

(報告者：智原哲郎 大阪女学院短期大学)

### 6月3日(土) -札幌- 北海学園大学

会場となった北海学園大学には、北海道各地から、大学・短大・高等学校の教員をはじめ、会話学校、あるいは教材や学習プログラム開発の出版社関係の方々など30名程の参加があった。

中村洋一事務局長の「古典的テスト理論」に関する説明では、この理論が正答数に基づく得点を用いていることにより、テストやテスト項目の特性が受験者集団に依存すること、あるいは、受験者の能力値の算出がテストやテスト項目に依存するなどといった、いくつかの欠点が指摘された。

続く、大友賢二会長の「項目応答理論」に関する説明では、確率論に基づくデータ処理により、古典的テスト理論の欠点がカバーできること、また、さらに、受験者の応答をその都度判断して、その受験者の能力に適したテスト項目を与えるコンピュータ適応型テストが可能になる点など、新しい理論の応用についても、言及があった。

質疑応答では、テスト理論の新しい方向に刺激を受けて、活発な質問が相次いだ。

(報告者：塩川春彦 北海学園大学)

## 6月10日(土) -神奈川- 慶應義塾大学

慶應義塾大学を会場にしたワークショップは、6月10日に行われ、41名の参加者があった。セッション1では、会場校のあいさつ、会長のあいさつ、学会の簡単な歴史の説明に続き、中村洋一(常磐大学)の古典的テスト理論の解説が行われた。約40分程であったが、何となく日常的に行っている生徒、学生の評価に反省を与えてくれる分かりやすい講義であった。そのあと会長からIR理論について約60分にわたってその理論のあらましとこれを応用した具体的な例を含む解説があった。古典的テスト理論との差異がよく理解でき、実際に共同研究を行ってその長所を確認したい、という感想をもった。質疑応答の時間が予定より短くなったのが残念である。

アメリカの大学を連想させる広大なキャンパスが特に印象に残った。

(報告者：清川英男 和洋女子大学)

## 6月10日(土) -名古屋- 中京大学

前日の豪雨のためか人通りも疎らに感じられた名古屋市八事の中京大学で最後のワークショップが行われた。参加者が少ないのではと心配していたが、すぐにホッと胸をなでおろすことになった。

大学関係者、語学関連企業の責任者、高校教員はもとより、これからの言語テスト

研究を担っていくであろう若い世代(大学院生や学部生)の参加が目立ち、開始直前は30名程度であった参加者数は最終的に60名近くにまで膨れ上がった。ワークショップ開始後、JLTA発表者(スラッシャー氏と中村優治氏)と司会者(伊藤)と相談し、まずはJLTAの設立経緯と活動内容を簡単に説明した。中村氏の発表は、言語テスト研究におけるテストの種類の説明が中心であった。説明はつねに具体的事例を十分に列挙しながら行われたため、聴衆はうなずきながら聞き入っていた。次にスラッシャー氏の発表が行われた。氏の流暢な日本語と丁寧な説明方法が聴衆を魅了した。発表終了後すぐに活発な質疑応答が行われた。休憩時間の確保のため司会者がマイクで中断させたが、休憩中も発表者のまわりには複数の質問者が取り囲んでいる状態であった。休憩中は参加者同士で親睦を深め合うこともでき、意義のある時間であったと確信している。その後のETS関係者による発表が開始した時には、これまで以上になごやかな雰囲気会場をおおっていた。会場の設定と運営はCIEEの方々常にかサポートして下さったお陰で円滑に行うことができた。今後もこの様なワークショップを通して言語テスト研究の重要性をアピールしていきべきだと痛感させられた1日であった。

(報告者：伊藤彰浩 愛知学院大学)

ⒺⒻⒼⒽⒿⓀⓁⓂⓃⓄⓅⓆⓇⓈⓉⓊⓋⓌⓍⓎⓏⓐⓑⓓⓔⓕⓖⓗⓘⓙⓚⓛⓜⓝⓞⓟⓠⓡⓢⓣⓤⓥⓦⓧⓨⓩ⓪⓫⓬⓭⓮⓯⓰⓱⓲⓳⓴⓵⓶⓷⓸⓹⓺⓻⓼⓽⓾⓿ⓀⓁⓂⓃⓄⓅⓆⓇⓈⓉⓊⓋⓌⓍⓎⓏⓐⓑⓓⓔⓕⓖⓗⓘⓙⓚⓛⓜⓝⓞⓟⓠⓡⓢⓣⓤⓥⓦⓧⓨⓩ⓪⓫⓬⓭⓮⓯⓰⓱⓲⓳⓴⓵⓶⓷⓸⓹⓺⓻⓼⓽⓾⓿

## 「言語テストワークショップ」を終了して

加藤 直人 (国際教育交換協議会 TOEFL 事業部 部長)

この度はETS主催のTOEFL CBTセミナーを開催するにあたり、日本におけるテスト理論研究の権威の先生方のお集まりである外国語教育評価学会(以下JLTA)の大友賢二会長をはじめ、全国の先生方のご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございました。5月20日の東京セミナー、福岡セミナーを皮切りに約一ヶ月間に渡り、北は

北海道から南は九州までの全国主要都市でセミナーを開催しましたが、お陰様で無事終了することができました。米国ETSに代わりまして厚く御礼申し上げます。

さて、今年の10月からいよいよTOEFL試験が従来の紙と鉛筆を使う方式から、コンピュータのマウスとキーボードを使う方式(以下CBT)に大きく変わろうとしてお



through the steps of creating a test of language for specific purposes. The next two chapters present various tests that attempt to test special purpose language. The book concludes with a discussion of technology in language testing.

Douglas makes some very important points in this book. His insistence on the inclusion of specialists in the area being tested is certainly correct. Language testers or applied linguists need to learn from these specialists what sort of language is used in that specialty and what constitutes successful language use by practitioners of their field. Douglas is also right in pointing out that the test tasks must force the test taker to engage in meaningful communication.

In the opening chapter Douglas gives reasons for testing language for specific purposes. But these reasons are grounded in theory not practice. And in the very last two pages of the book he points out that in some testing situations specific purpose tests are being replaced by tests of general language ability. But he never explains why or tells the reader what the practical reasons for choosing between specific purpose or general ability language tests are. A test is only as good as the decisions that are made on the basis of the information it provides. A good test provides information that allows good decisions to be made. A bad test doesn't. We need to know in what situations a special purpose test would provide better information and in what situations a test of general language ability would be best. Douglas provides no discussion whatsoever of one of the most difficult problems in a task based approach to language testing for special purposes (or in general language testing as well), devising parallel tasks. A reasonably creative test developer can come up with the sort of tasks that are needed to engage the test taker in

meaningful language use and that meet the other requirements that Douglas lays down. But having one set of such tasks is rarely enough. For test security reasons it is usually necessary to have parallel forms of the test. But coming up with a second (or third or fourth) set of tasks that match the initial set is quite difficult. In traditional multiple-choice tests, we have a reasonably clear definition of 'parallel form'. If we can match item difficulty and discrimination indexes, we consider the forms parallel. Clearly things are not so simple in preparing parallel forms of the sort of tests that Douglas is advocating, and I would have been happy to hear how he thinks parallel might be defined in task based tests of specific purpose language. The last question I would like to raise about assessing language for special purposes is whether such testing is possible for all levels of language competence. Alderson (*Assessing Reading*. Cambridge University Press. 2000. page 23.) reports that reading researchers have found a threshold in that skill. Up to a certain level of proficiency, reading tests are primarily testing basic language competence. Only after that threshold is reached do such tests begin to measure what we usually consider reading skills. Is there such a threshold in special purpose tests as well? This is an important question because we are sometimes asked to design tests for a specific group who claim that tests of general English do not fairly measure their English ability. But if they do not have basic language skills, will a special purpose test do any better in assessing their ability? I had hoped to find an answer to these questions in Douglas' book. Now I must hope that the publication of this important work will prompt discussion and research in this area that will help answer the questions I have.

◇ 第4回(2000年度)全国研究大会のご案内と発表者募集 ◇

大会テーマ： Computerized Language Testing: Theory and Practice  
(コンピュータ使用による言語テストの理論と実践)

日時： 2000年10月8日(日) 8:30 ~ 18:00

会場： 東京経済大学6号館、〒185-8502 東京都国分寺市南町 1-7-34

日程案： 8:30 ~ 受付(6号館1階)  
8:50 ~ 9:00 開会行事(7階大会議室)  
9:00 ~ 10:20 研究発表(発表30分, 質疑10分)  
10:20 ~ 10:30 休憩  
10:30 ~ 12:30 基調講演(7階大会議室)  
「コンピュータテストの理論的背景について」  
講師 前川 眞一(大学入試センター)  
12:30 ~ 13:30 昼食[役員会]  
13:30 ~ 14:10 研究発表(発表30分, 質疑10分)  
14:10 ~ 14:20 休憩  
14:20 ~ 16:00 パネルディスカッション(7階大会議室)  
「コンピュータ使用による言語テスト(CAT/CBT)  
が外国語教育に与えるもの」  
16:00 ~ 16:30 総会(7階大会議室)  
16:30 ~ 16:40 閉会の挨拶(7階大会議室)  
16:40 ~ 18:00 懇親会(7階ホール)

参加費： 会員1,000円、一般3,000円

懇親会会費： 4,000円

研究発表申し込み：

研究発表希望者は、発表概要を e-mail により、nkyj@tku.ac.jp (全国研究大会担当：中村優治)宛送付してください。なお、必要な場合には原稿及びフロッピーを提出していただきます。

発表概要は英語の場合(250語)、日本語の場合(500字)でお願いいたします。

発表概要の申し込み期限： 2000年9月1日

展示について

申し込み期限： 2000年9月30日

費用：テーブル一脚につき、賛助会員は20,000円、一般は40,000円。

公告について

版下送付期限： 2000年9月1日(事務局必着)

費用：A4サイズ1ページが、賛助会員は10,000円、一般は20,000円。半ページが賛助会員は5,000円、一般は10,000円。

\* 展示・公告の詳細については、事務局にお問い合わせ下さい。

=====

## 学 会 短 信

### 1. 会費の納入について

郵便振替による会費の納入で、2000年度の会費を未納入の会員は、すぐに事務局宛送付して下さい。また、銀行口座からの引き落としをご利用の方は6月1日に引き落としを完了いたしておりますので、ご確認下さい。

### 2. homepage の更新について

JLTA の homepage を更新いたしました。今後随時、情報を提示していきたいと考えております。掲載希望の情報、あるいは、homepage の内容についてのご意見等、お寄せ下さい。

### 3. 住所・所属・銀行等の訂正・変更

名簿の訂正、あるいは住所・所属などの変更が必要となった会員は、正しい、あるいは新しい住所・所属を、事務局までご連絡下さい。

また、銀行振込で会費を納入している会員の中で、合併・吸収等により、銀行名あるいは口座番号等の変更がある場合には、至急、事務局までご連絡下さい。

### 4. その他

JLTA の活動に対するご意見やご要望、Newsletter 等への掲載希望記事などがありましたら事務局までお申し付け下さい。

より充実した活動ができるよう、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

=====

外国語教育評価学会事務局  
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758  
TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp  
URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>

